

素人のざれごと(戯れ言)

『日本語で生きよう!』(2)

Q=女子中学生の素朴な好奇心

「日本語のことをもう一步知りたい」

A=古稀老人の願い

「日本の魅力を日本語で学ぼう」

会員 山崎泰二

13. 日本語文字の導入から今日まで

先にも述べましたが、文字の無い世界では「口伝と歌舞」で先人の経験や知恵を蓄積し伝達した。具体的には農耕中心社会の中から自然崇拜、先祖祭祀が始まって、家族や所属集団の祝い事や神事・葬祭を儀式として、楽しみ、時に悲しみながら子孫に伝授してきた。

特殊才能を持つ口伝者は、見て(視覚)音を聴いて(聴覚)暗記し身近なものに託して覚え「語り部」として記紀に残した。一方多くの民衆は芸能として楽しみながら、専門職の能や狂言師に自分たちの誇り高い歴史や当時の様子を託し発展させ、伝統芸能として立派な芸術に仕上げた。

口伝から読み書きに移す懸命な努力の積み重ねが、漢字を日本流に導入した。(飛鳥奈良時代) 先ず中国の漢文に「返り点」や「レ点」を付けて、日本語の読み見下し文とした。私はこれらの工夫は時代が下って開発されたものと信じていたが、実は律令社会に入り文字を導入する当初からの発明と知って、先人の知恵の確かさに改めて驚き感動した。

万葉仮名から平仮名に発展し、後に女流文学の世界が平安朝に開花します。文字のイメージの通り「ゆっくりした話しぶり」で「奥

ゆかしく」「女らしく」を演じていました。当時の庶民の使っていた言葉は見えにくいのですが、万葉集には詠み人知らずの和歌が多数登場します。若い兵士や見送る妻の哀歌が感動を呼んでいます。

公式には和風漢文を作り、読み下しの工夫もしています。お経を誦んじながら難しい経典を学問として多くの若者が学びます。学びのレベルで昇進が変わります。出自よりも実力の社会でした。仏教と儒教を国体の基礎に置き道教は神祇の祭祀に取り入れました。神と仏と儒教がこの国の柱になったのです。

公家社会の言葉が平安の長い年月をかけて、京言葉として庶民に定着し、ゆっくりした滑らかな雅(みやび)の文化が言葉にも表れます。庶民は「一所懸命」に土地を開拓し精魂込めて耕作します。苦勞が報われる社会でした。やがて武士の台頭を迎えます。

注記 公家は武家に対する貴族一般の表現で、公卿は天皇(国家)から三位以上の爵位を受けた貴族の尊称

地方の武人が中央に集まります。お国訛りが横行します。皆さん『平家物語』や『源平盛衰記』でご存知の貴公子=源義経が育った東北弁で「まんず、えがったナアー」としゃべると、公家衆だけでなく京人は驚きます。また木曾義仲が信州(長野)の山の中から京に出て、乱暴狼藉をしたと伝えられています。私は単に「信州訛り」が民衆に伝わらなかっただけだと思います。ゆっくり型の都人(みやびと)にとって、武士は「荒くれ」と映ったのでしょう。当時の話し言葉は能や狂言などに垣間見ることが出来ます。生活や生き様を喜怒哀楽の表現で演者も観客も楽しんでいます。当時の読み語り本を、散文調で叙事詩的な物語を謡曲にあわせて演じているのです。

江戸期に入り参勤交代で殿様だけでなく農

民の中から刈り出された下級武士が上京し江戸市中を闊歩します。お国訛りの大合唱です。

当時江戸では武士言葉（当時の武士は軍人ではなく単なる官僚）（＝通常は山手言葉）を使い、庶民は下町言葉を使っていました。時代劇の「……でござる」は武士の話言葉で、書き言葉は「候文（そうろうぶん）」でした。庶民である江戸っ子の使っていた言葉は落語の世界で生きています。

備前藩士は言葉の前に判別されました。「貧素な身なり」が備前藩士のシンボルです。

こちらは柴田一元就実大学長の講話で知りました。お陰で備前藩は江戸260年間安泰でした。池田家伝統の家訓が生きていたのです。柴田先生のお話は何度聴いても飽きません。難しいことを判り易くお話していただけます。「これぞプロ中のプロ」と追っかけファンの一人として自負しています。

ともあれ江戸文化は上方の浄瑠璃と歌舞伎の最盛期でした。庶民の生活が豊かになった証拠でしょうか。

幕末の江戸人は「しゅんと」しています。なんと言っても元気な薩摩・長州・土佐等の猛者（もさ）が京都で活躍し江戸を制圧し、東京に帝（みかど）を遷都します。背景に国学台頭と洋学のしゃれた社会の到来です。武士に代わって知識人が洋風文化を広めます。

夏目漱石の「我輩は……」「……である」の新しい東京言葉が文明開化の尖兵として走ります。同時にこの時代から、西欧に習って話し言葉と書き言葉を同一にする国策に代わります。が、実態は先の終戦時に「漢字と平仮名併用文」に教科書も含めて変わって、やっと言文一致策が実現しました。終戦後しばらくは文語体の話し言葉が書籍に残っていま

した。今読み返すと読み難さが懐かしい齢になりました。

概（おおむね）以上の流れで弥生期から今日までの日本語を見てきました。中学生の皆さんに少しでも役に立ちましたでしょうか。拙論を聴いていただき有難う御座いました。次に日本語に関連する事項について自説を述べます。

14. 公用語と国語(日本語)

西暦2000年（平成12年）頃、21世紀を迎え、マスコミや世情が新世紀に入って、大いに盛り上がっていた頃の一つに、『21世紀の日本の構想』（小淵内閣の私的懇談会）があり、英語を公用語とすべき提案がなされ、今もその線上であると私は認識をしています。

辞典を紐解（ひもとく）までもなく、時の政府が使う国民向けの言葉＝公用語が、日本の場合には「日本語」だけであるとの不文律の常識が存在する。（法の規定は無い）欧州などに見られる、異民族が混成している国家の場合には、単一言語では国体は維持できない。そこで各国とも「公用語」を制定しているのだ。同じ土地に暮す異民族の言葉の学習を強要している訳ではない。

日本は単一民族で単一言語の認識（実際にはアイヌなどの先住少数民族や朝鮮半島からの移住民族などが存在＝別の問題）だから、公用語の公式な定義は無いが、世界的には単一民族一言語の方が少数である。今回の提案のある「英語」は第2公用語と仮称しているが、正式には単なる外国語の一つであろう。勿論第2国語でもありえない。公用語制定の法律から始める必用がある。

昨今世界の趨勢は米英を中心にした「英語」

が世界の共通語的な意味合いを持ってきた。経済・文化の面で世界をリードしている現実の中で、日本が世界に互（ご）して行くためには「英語」が解せないでは勝負になら無いとの論理である。その主旨には私も理解できるし賛同する。しかし何か変だと思いませんか。

本来の「公用語」は民族の持つ言語を尊重し、国家の構成員である多種民族に国政を円滑（スムーズ）に遂行し行政サービスを自国民（多民族＝多民語）行き亘らせる必用から、制定しているのが公用語であって、日本が今日進めようとしている「英語」は、単に異民族の外国語の一つに過ぎない。前述の考え方に依れば日本国籍を持った少数民族の言語（例アイヌ語や朝鮮語など）を第二公用語に制定するのであれば、意味合いが変わってくる。

英語を学び使えるように学習する＝教育する意義は、その言語の持つ文化などを理解し、グローバル化した世界に羽ばたき、経済・文化の面で貢献できる国民の育成に寄与することが、他国民からも期待されている。

日本人は「話し言葉」しか持っていなかった時代から、その後文字＝漢学を学び、日本語＝日本文化を形成してきた。その精神は幕末の洋学や、昨今の外来語など旧来の日本語を壊すことなく発展してきた、今もその俎（そ）上にある。

そうした認識の上で昨今の論調を省みると、今までの教育である「英語」を特別な扱いで国民に義務的概念に押し付ける懸念さえ感じる。本来教育は国民の権利であり義務でもある。国政は大きな負担を惜しみなく推進し、今日の日本があるが、第2公用語として制定し、国民に日本語以外の「英語」に習熟させようとする国策には、私は多少の違和感を持っている。

元来わが日本民族は新しい文化への探究心

は旺盛で、過去の歴史が証明している。必用ならば「洋語を外来語＝カタカナ語」とする新しい日本語を創設しているのではないか。

将来を担う子供たちが、自国語だけでなく多民族の文化を知るために、他国語を学び文化や経済面で交流するツールとすることの意義は大きい。

私の孫は私立の保育園に0歳からお世話になっていて、日本語もままならない段階で英会話を日常語として園内では使っているらしい。時に接すると可愛くもあり、痛ましきもある。

日本語の良さを知り、伝統文化を享受しながら異国の文化を理解することが先ず持つて取組むべきことではないか。

15. 紙 paper のこと

紙の起原は文字＝漢字に比べると、以外と新しい。当時中国では文字は木簡や竹簡でした。一般には木や竹を削って板状にし、文字を書きました。高官は高価な絹布を用いたようです。木や竹の簡それに骨片（彫刻？）では保管が大変でした。後漢時代（25～220）の皇帝が部下の蔡倫（さいりん）に命じて作ったのが「植物繊維を細かくして水に溶き漉（す）き上げて薄い板状」にしたものを発明しました。（＝蔡侯紙）西暦105年のことです。毛筆で書きやすくスペースもとりません、その上大量生産が可能になったのです。木簡や竹簡は紙に比べると保存が出来ますので、遺物として考古学の世界では一級の資料です。紙は製本が出来ます。書物として重宝されました。

ヨーロッパではエジプトのナイル河のアシの茎を平らにして作りだしたのが有名なパピルスです。紀元前2500年の遠い昔の話です。Paperの語源にはなりました。その後、彼らは

遊牧の民でしたから羊の皮を薄く延ばして紙状（＝羊皮紙）にして文字を書いていたのです。しかし文字は書けても製本は出来ません。漉きの工程を経っていないので学者は紙の仲間には入れていないのです。

西暦 751 年にサラセン帝国（**7 世紀に古代イスラム教徒がアラブを中心に一大帝国を造りヨーロッパ大陸を席卷した**）が中国の唐（619～907）と戦い、捕虜にした中国人が紙漉きの技術を持っていました。羊皮紙に比べ格段に使い勝手が良いのです。しかし簡単には製造が出来ません。中国から高価な紙を購入するしかなかったのです。そんな関係は清国（1616～1912）まで続きます。西欧も産業革命（18 世紀半ばから 19 世紀）の時代に入り、資源を求めて植民地政策を進めます。中国にはアヘンを売り、磁器とお茶と紙を求めます。本国に持ち帰り莫大な利益をあげます。

日本には文字が導入された律令時代（7 世紀）には中国で開発されたばかりの印刷技術と共に「紙漉」技術が導入されます。日本の山野に自生している三桮（みつまた）や楮（こうぞ）は豊富にあります。高麗（こま）の僧曇徴（どんちょう）（生没不詳 610 来日）は仏教を広めるために、日本の豊富な紙の資源を活用し、製紙技術を伝授してくれたのです。推古女帝（554～628）の時代です。聖徳太子（574～622）も活躍して居ます。仏教→経典→漢字→紙の図式になるわけです。

和紙はその後素晴らしい発展を致します。金粉を地にした高級和紙などは芸術品でしょう。日本各地に伝統技術が残っています。明治 5 年（1872）洋紙が日本に入り印刷技術も洋式化するまで、長く日本文化を支えてきました。昔から日本人は、これは良いと思えば躊躇無く取り入れる進取の気質は変わりません。残したい気質です。

三桮などの表皮の黒い部分（黒皮）は今のナイフのようなもので削り取り、白皮にしてから漉き工程に入ります。色抜きの技術も追々進歩します。手先の器用さと粘り強い根性が良質な和紙を生んだと言えます。

江戸期になり生の江戸前海苔を乾物品に加工した「浅草板海苔」を全国に発信しました。紙漉きの技術を取り入れた「知恵者」が居たのです。大ヒット商品になりました。

戦後東京オリンピックの前までの、建築や機械の設計図は、平板に T 定規を用いて美濃紙にカラスクチ（烏口）で墨入れをして描きました。今のコピーに当たるものは「青焼き」と称して、紙面全体が青地になり設計図の部分が白色になるもので、アンモニアの臭いに悩まされながらの作業でした。墨入れした設計図は美濃紙が定番でした。洋紙と違い折り曲げても癖が直りやすく、何より丈夫で保管に適していたのです。

僅かの時の流れで、カラス口は鉛筆に変わり、息子の時代には「製図技術」を学ばないでキャドの時代に入りました。それでも当初は装置だけで 1000 万円/セット、操作するのに 1000 万円/年間の費用がかかり、岡山でも大手企業が国の融資を受けての導入でした。今はパソコンも安くなりソフトも無料で導入できます。

サラセン帝国には格別の思い出があります。中学 3 年の時に社会科の授業でこの時代のことを習いました。先生の説明に納得がいかないで質問したところ、次の授業の当初に「誤り」を認めもう一度同じページを教えてくださいましたが、一時間丸々逆戻りした授業に、後に私の妻になる知恵さんたち多くの級友からブーイングを受けました。後に再会した坂本先生から「君には忘れられない……」と意

味深長な言葉を戴きました。あのときの先生の態度は生涯忘れません。立派でした妻との語り草になっています。

16. 製本は手書きで写書し写本

漢文字は筆を使って縦書きとし、木簡や竹簡に書いていました。筆の字は「竹」冠に「聿」（筆の字の異体で毛から来ている）を合わせた文字で、竹を軸に羊や馬その他の小動物の毛を取り付けた筆記用具で、漢文字を縦書きにするのに適しています。中国古代の秦（しん）（紀元前 771～前 206）に筆のことが記録に残っているからです、筆は文字と共に進化してきました。ちなみに日本の訓読みの「ふで」は文+手の「ふみて」から来ていることを付け加えておきます。

前段で紙が発明され格段の文化の発展を見ましたが、製本される事で多くの目に触れ、次の文化の発展があります。印刷技術が開発（中国で 868 年）されるまでの長い期間、紙に書写してそれを糸紐（ひも）綴じて製本しました。主に儒書や仏教の經典であります。全て手作業の写書でした。江戸期貧乏書生は高価な本は買えません。流通もあまりしていない時代です。必用な本は師匠から借用し自分用と師匠のお礼用に余分に写書し製本して返しました。単に読むだけでなく 2 度 3 度同じ本を写書するのです。頭の中にしっかり収めることの出来たのは当然です。これらの知識の累積が幕末から文明開化の明治維新の原動力になりました。

**お願い「写書し 1 冊か 2 冊を貸主にお礼として返した」
風習と書かれた書物の一場面が、脳裏から離れません。その言葉＝単語をご存知の方は教えて
いただけませんか。よろしく。**

私の妻は四国遍路をしています。般若心経を誦んじるだけでなく、写経をして奉納しています。庶民に根付いたこの良き風習は今

日まで面々と続いています。

写経＝供養などのために経文を書写すること。奈良時代には専門の「写経司」と称する役所も設けていました。



写経は今では現代アート

赤枝佳代子氏(津山在住)の作品 筆者所蔵

山陽新聞に連載中の『御用船帰還せず』の 2014. 8. 16 掲載文中に、聴き慣れない「双鉤填墨」(そうこう てんぼく)の熟語が出てきた。高名な「書」(掛軸や手紙類)を今のコピーと同じく実物と変わらない作品に仕上げる技術で江戸の下級武士の内職の一つでした。娘も見よう見真似にその術を身につけた登場人物の所作を、著者の相場英雄氏は「最初の枠線をより正確に丁寧に写し取り、原本と同じような墨の濃淡を加えることで、本物と見間違えうばかりの写本が出来る……」と表現している。

双鉤填墨の技術は唐の六朝時代(222～589)から伝わっている技術だが、木や石に彫刻し拓本をとる印刷技術の普及で衰退し、特殊技能として連綿と伝わっている。

たまたま執筆中のテーマに沿った熟語が新聞連載の時代物の小説の中から、学ぶことも多い。参考にさせていただいた。

17. 印刷技術の発展

木版印刷での本が、今から 107 年前の 1907

年(明治40年)に中国の古都敦煌(とんこう)で唐代の『金剛般若波羅密教』の経典が発見されました。西暦868年に作られた書物で、通説ではこれが木版印刷の始まりとされています。漢字は中国で20万字、日本で6万字と言われています。資力を問わない、限られた国家事業としてのみ印刷製本が可能でした。結果的に書写製本の時代が長く続きます。日本でも早い時点で導入されますが、一般への普及にまで至りませんでした。その技術は面々と続きます。江戸時代には浮世絵を版木に彫り(彩色版木)流布しました。幕末渡来した西欧人によりヨーロッパに持ち帰り多くの作品が保存されています。岡山にも所縁(ゆかり)のある棟方志功(1903~1975)の作品は大原美術館や津山のM&Y記念館に多くの作品が残っています。その源は「木版印刷」の技術に由来しているのです。確かな痕跡をみました。

ヨーロッパではドイツのヨハネス・グーテンベルグ(1400~1469)が1445年に活版印刷を発明しました。予め各種の活字を作って置き、それを文章に合わせて拾い出し、ブロックごとに集まりを作り、ページを重ねて行く。こうして一冊の本ができるのです。アルファベットの文字が少なく横書きが幸いしました。漢字文化圏では文字数の数が「準備する活字」の多さが厄(わざわい)して、遅れることになりましたが、活字そのもの製造技術の向上(写真植字=写植など)で、近代化に成功します。現代はコンピューターとプリンターの時代(デジタル製版)になり益々進歩発展しています。

私は中学の時新聞部に属していました。謄写印刷が今のコピーの使い方と同じで、学期末のテストの問題も、ガリ版刷りの先生の手作りでした。ガリ版の「ガリ」は蠟紙を鑷(やすり)板に置き鉄筆で書く時の「音」がガリ

ガリしたことから、俗にガリ版と称し、専用の小部屋に印刷機が設置され、その室名に手書きで「謄写室」と書いてありました。インクの油で汚れた学生服は(元々誰かの譲りものでしたが)木の盥(たらい)で俎板(まないた)を用いて、母が洗ってくれました。ガリ版の文字の書き方にも技術があって、例えば「す」の字は「ナ」と「c」の組み合わせで書きます。「。」ではなくCの字なのです。鉄筆が重なりますとその部分から破れてしまいます。そんな技も先輩から教わりました。

高校になるとタブロイド版4ページの紙面で全国大会に県(鳥取)を代表して参加していましたが、部活動費(遠征費)の予算が少なく、私費で京都(全国大会の会場)まで行く費用を親に頼めず、仲間に譲ったこともあります。

印刷は日本海新聞の薄暗い活版室で、新聞社の仕事が終わった職人が、組み上げてくれた「ゲラ刷り」を、前夜から徹夜で待機していた我々が引き取り、素早く校正=今の言葉でチェックするのが新米部員の誇らしい役目でした。早朝に印刷された紙面を帰路の汽車の中で、安物の黒パンを齧(かじ)りながら仕上がった紙面を手にした感動が忘れられません。そんな青春でした。

18. 常用漢字と現代

日本語は漢字を母体にしながら弥生語を話し言葉のベースにして発展し続けます。今使っている文字は6万語とも言われています。全て文字を身に付けるには国語学者になって一生を過ごすしかありません。

特に戦後漢字の不要論が出る中で、最低限これだけはとして「当用漢字」(1976年1850文字)が制定され小学で1006文字(教育漢字)

を覚えれば良いことになってはいますが、中々身につけません。

現在常用漢字は平成元年に制定され平成 22 年に 2136 字 (音 2352 訓 2036 合計 4388) の音訓文字を覚えれば一人前の日本人といえます。(強制されていません) 専門家はそのうち 1500 文字を目安に普及に励んでいます。

大人でも小学生が身に付けるべき 1006 文字を全て書ける人はグッと減ります。「話す」「読む」「書く」は全て完璧でなくてもかまいません。今ではケイタイ＝携帯電話を辞書代わりに利用している人が増えました。今回の改訂で専門家の意見を取り入れて「振りかな」＝ルビを多用して容易に読めるよう勧めています。最近の社会変化に国(文部科学省)も追認しているのでしょうか。

日本語学者の野村雅昭先生(1939～・日本語学会会長)は衝撃的な発言をなさっています。「常用漢字は 1500 語ぐらいにして、国際語の仲間止まる努力をしないで、文字数を今回のように増やし続けると、国際語の仲間から失脚する」との主張です。

日本語は元々微妙な表現が多く(私はそれが日本の文化だと思います)外国人から見ると難解な言語になっていて、東南アジアから介護分野などに進出する労働者の弊害になっているとの指摘です。国家試験合格の前に難しい日本語をマスターしなくてはなりません。実習などの面では患者に好評でも、国家資格を取れないと帰国させられるのです。

視覚・聴覚障害者にとっても同じことが言えます。弱者に優しい社会の実現に常用漢字が障害になってはいけません。子供にとって暗記を求められる漢字の試験と、年代と歴史上の人物を暗記する「歴史」も嫌いな学科の二大科目と聞きました。それで良いのでしょうか。

野村雅昭先生の話も傾聴に値すように思えてなりません。日本文化を世界の人々が認めてくれる時代になりました。それに相応しい「日本語」が求められています。

19. 方言でないアイヌ語

民族ごとに言語＝言葉があると申しました。さすれば地方ごとに言葉があつて当然です。それが方言と呼ばれています。

古代から「エゾ」「エミシ」「エビス」は「蝦夷」の文字が使われ、列島の遠く離れた僻地のイメージで大和人は捉えていました。東北北海道は全て蝦夷の地でありました。氷河期の終わり旧石器時代末期に、樺太(カラフト)と陸続きの地に今のアイヌ民族が広く分布しており、列島の縄文人と似た生活をしていました。

調べてみるとアイヌ民族の使うアイヌ語は言語学の世界では日本の方言の仲間に入っていない。国家では正式に認めていない民族も、学者の間では単独の民族語として、はっきり区別しています。金田一京助先生(1882～1971)の民俗学者としての調査と功績は大きいものがあります。先生は『明解国語辞典』の編者として子供の時から馴染みが深く常に枕元に置いて愛用しています。親子三代にわたる国語学者の家系ですが東北出身らしく素朴で親しみやすい語りは孫の代も変わらないようです。最近孫の秀穂先生が京助・春彦先生のことをエッセイにして『金田一家、日本語百年のひみつ』(朝日新書)を出版されました。是非拝読したいものです。

アイヌ民族は日本列島の先住民族として、樺太・北海道・千島・東北に各々アイヌ族が分

類されアイヌ語の方言的な形で残っている。文字を持たないで口承の形で、自然を相手に共存して来ましたが、江戸初期から蝦夷（えぞ）地（今の東北から北海道以北）に和人が侵略し明治になり、益々強力な同化策が今日まで続いています。明治32年「北海道旧土人保護法」制定以来土人扱いを受けてきましたが、平成11年にやっと「アイヌ文化振興法」が制定され「土人」扱いはなくなりました。しかし国による少数民族の認定はされていません。択捉（エトロフ）や国後（クナシリ）を日本の固有領土と主張するならば、先ずアイヌ民族を先住の少数民族として公式に認めることから始めるべきです。

アイヌとはアイヌ語で「人」を意味するように北海道には今でもアイヌ語からの「借用語」が多く残っています。代表的なアイヌ文化は「ユーカラ」で、アイヌの口承叙事詩で先祖を崇拜し自然に祈り今日に伝えています。

**アイヌの楽器＝ムックリです
音色が哀愁をおびています
残念なら私は演奏できませんが、専門家の奏でるムックリは、アイヌの想いが伝わってきます。筆者所有 写真も**



私有土地を持つ概念のない民族で、自然を神として崇拜しながらの生活は、縄文人と変わらない生き方（過ごし方）でした。氷河期で大陸と陸続きの旧石器時代からの先住民も、和人＝本土人が、時の政権の政策で移住し、大地を分割横領しました。真摯に歴史に向き合うべきと考えます。アイヌ語を日本の方言扱いにしない学会に敬意を表します。

20.方言で地方文化を守ろう

日本の方言は本土系と琉球系の二つの方言に分類されているのが定説で、本土系は東部・西部・九州に区分した東条操（1889～1968）の説（1927）が発案していて、柳田国男（1875～1962）等の多くの民俗学者や言語学者が研究し続けている。私は琉球の言葉は「琉球語」（＝沖縄語）と独立したものと考えていましたが、専門家は日本語の枠の中で大きく二つに区分しています。

俗に東京弁（＝標準語）、関西弁と云われ関西は長く政治の中心であった京言葉に源がありますが、商人の力が増した江戸期以降大阪弁が京言葉を席卷しています。気位の高い江戸人は銭のことに執着する商売人＝大阪人＝大阪弁を蔑視する傾向は近年まで続いていました。

岡山で方言を語らしたら青山融氏（1949～津山生まれ）が一番身近な知人である。マスコミに常時登場し著作も多い。歴史系のウオーク仲間ではあるが、オセラの編集長（当時）の肩書きに似合わない気さくな好人物である。お陰で私もオセラに登場したことがある。

オセラの雑誌名は中国地方で大人のことを「オセ」と云います。ラは等にかけて、しゃれた雑誌名になっています。

昨今「方言指導」として映画やTVドラマの画面に「スタッフロール」に流れることが多くなった。振り返るにこの役どころは、昔は聞かなかった。24年前の『イミダス』には掲載されていないから、方言が重視されて来た証拠と、内心喜んでいる。当時はまだ方言は軽視された中央志向の世の中だった。軽快なメロデーに乗って「J・J・Jー」が昨年の流行語大賞になった。今年も聞きなれない「こぴっと」（甲州弁）にも慣れてきた。

子供のころ、米子の伯父夫妻が帰省した時に話す「西言葉＝米子弁＝出雲ことば」の独

特な「ズーズー弁」で「段々・段々」の連発に奇異を感じたことが懐かしい。夜学時代の関西弁が身に付いたころ、東京に出た。若い同僚の女性に接して一種の畏怖を感じ、早々に幼馴染と結婚した。時を経て昔の同僚と再会すと「君も岡山人になったね」と会話の中に出てきた。「そうじゃ 私も おきややまんじゃ」と返す。マスコミのお陰で急速に中央集権が進んだ象徴が東京弁＝標準語で、地方の人は言葉の面でも二重構造の社会に生きている。

昭和40年代初め、青森弘前城の仕事で、津軽弁でしゃべっているオバサンに話しかけると、綺麗な標準語の返事が返ってきた、東京オリンピック直後の頃を思い出す。既に言語の二重化が浸透していた。

選挙の時に地方重視を連呼する政治家も、活動資金は都会の企業から得ているのかどうか、一向に地方は良くなる。しかし都会育ちやUターンらしき子連れ若夫婦が、棚田で精を出したり、牡蠣（かき）筏（いかだ）に乗って作業をする映像を見るたびに「ホットする」。自然との共生は地球環境を守る原点だ。岡山を中心にある後樂園の少し上（かみ）手の旭川（一級河川）で鮎釣の竿がしなる。そんな環境を守っていききたい。地方文化の象徴的な方言も大切な要素と私は思う。

立石憲利（1938～ 津山市生まれ）先輩は



県下に残る民話を丁寧に聴き取り、その言葉を使って今に残す活動（民話の本や語り部）を生涯の仕事にされ、成果は大きい。

写真は 2011.1.18 山陽新聞

「日本語に生きよう」は、26ページになりますので、3回に別けて掲載しています。

1回目“きび考”工10号の内容

はじめに

1. 日本民族の起源
2. 弥生末期の日本人は大陸と交流
3. 古墳時代は独自文化
4. タミル語が黒潮に乗って
5. 文字導入を古事記と万葉集で見る
6. 歌と踊りで伝承
7. 文化の発展が文字を必要とした
8. もじは仏教経典（お経）で学んだ
9. 弥生語と漢字の融合
10. 近隣諸国の言語の事情
11. 日本語の二重構造（真名と仮名）

3回目“きび考”12号の内容

21. 外来語（カタカナ語）
22. 英語になった日本語
23. はなし言葉は古典・民衆芸能の中に
24. 書き言葉の日本語は文学の華（はな）
25. 点字も日本語
26. 手話も立派な日本語
27. 翻訳は著者を超える
28. 通訳は今の瞬間を表現
29. 速記は役目を終えたか
30. 新しい会話のコミュニケーション

以降は次号（12号）に掲載予定